言語聴覚専攻科

Postgraduate Speech and Hearing Sciences Course

2年課程	定 員
大卒者対象 大学卒業見込み者	40名

取得可能な資格

言語聴覚士
（国家試験受験資格）

言語聴覚専攻科の養成する人材

言語聴覚士は、言語、聴覚、認知、嚥下に困難がある方を対象に、それらの獲得や回復をサポートします。医学的な最新の知識や技能をもとに言語聴覚療法を実践し、それを科学的に評価し、自己の技能を高めることができる人材を育てます。

アドミッション･ポリシー

①言語聴覚の分野で活躍したいという目的意識が明確であり、何事にも自主的に取り組むことができる者
②基本的倫理観を持つ者
③各専門知識を学び応用するために必要な基礎学力を有している者
④海外の保健･医療･福祉、特に言語聴覚療法に興味を持つ者

MESSAGE

生きることに価値をもたらす、話すこと、聴くこと、解ること、食べることに携わることができるのが言語聴覚士です。近年、脳機能と言語の関係が解明されています。脳画像を読み取り、会話能力と結びつけて解釈できる力が求められます。また、ことばや読み書きの力を把握するために知能検査を代表として、様々な心理系の検査が実施できる力も求められます。言語聴覚士は幅広い知識と技能を持ち、乳幼児から高齢者まで幅広く対象とします。医療や福祉関係機関、学校や保育園、放課後デイ施設など多様な場で活躍が期待されます。気持ちを伝えたり食事が取れるようになったりするのは何よりの喜びです。言語聴覚士は、間違いなくやりがいのある仕事です。多くの方に仲間になっていただきたいと願っています。

高齢化、発達障害の問題でますますニーズ高まる医療専門職

言語聴覚士は、日本では1997年に法制化された国家資格です。超高齢社会となり、老齢期の脳卒中などの後遺症による失語症や嚥下障害、認知症が増えて、言語聴覚士を必要とする人は全国で650万人以上と言われる中、有資格者はまだ3.3万人ほど。圧倒的に不足しています。また、発達障害など小児言語分野における指導のニーズも拡大しており、今後、医療はもちろん、教育や福祉の分野にも活動の場が広がることが予想されます。

言語聴覚専攻科の特色

既に大学で学んだことや社会経験を最大限に生かして、最短の2年で言語聴覚士の国家試験合格をめざします。ニーズが高まる小児言語分野の教育が充実しているのも特長。これからの言語聴覚士に求められる発達障害に対応した評価訓練力を養うため、種々の心理や発達、言語に関わる検査や訓練の技法修得のためのカリキュラムを採り入れています。

POINT 1
2年間で言語聴覚士をめざす

社会人もしくは大学卒業見込みの方が対象の言語聴覚専攻科では、既に大学で学んだことや社会経験を最大限に生かして、最短の2年で言語聴覚士の国家試験合格をめざせます。専門基礎科目から専門科目へと系統的に学ぶ分かりやすいカリキュラムが特長で、他分野からの進学者でも無理なく必要な知識や技術を修得できます。

POINT 2
ニーズが高まる小児言語分野の教育が充実

これからの言語聴覚士には、自閉症や学習障害、ADHD（注意欠如多動性障害）といった幼少期からの指導が必要な障害、発達障害に対しても、評価訓練する力が求められます。本専攻科では、心理検査、発達検査、言語検査などの発達、言語に関わる検査や訓練の技法修得のためのカリキュラムを取り入れ、小児言語分野の教育を充実させています。

POINT 3
人間の尊厳、ことばの回復を図るスペシャリストを養成

脳卒中による高次脳機能障害や認知症などでは、失語症など言語機能の回復のみならず、その人の生き方や尊厳を守るためのリハビリテーションの有効性が認められています。本専攻科では、脳画像を読み取り、会話能力と結び付けて解釈する力、心理系の検査を実施する力を育て、言語聴覚療法の実践を科学的に評価し研鑽できる人材を養成します。

活躍のフィールド

医 療
●病院（リハビリテーション科、耳鼻咽喉科、小児科、形成外科、口腔外科）ほか

福 祉
●障害福祉センター
●小児療育センター ●通園施設
●放課後デイサービスほか

介 護
●老人保健施設ほか

学 校
●通級指導教室
●特別支援学校
（聴覚障害･知的障害･肢体不自由）ほか

企 業
●補聴器メーカー
●人工内耳メーカーほか

行 政
●福祉課 ●保健所 ●福祉相談所
●地域包括支援センターほか

これらの障害を持つ方に検査、訓練、指導、援助を行う

はなす
失語症
発声発語障害

きく
聴覚障害

食べる
咀嚼障害
嚥下障害

わかる
言語発達障害
発達障害
認知症

坂本 一馬 さん
柳川療育センター リハビリテーション室

言語聴覚士として活躍中!

幼児期の発達障害のお子さんや、入所されている重症心身障害の方たちへのリハビリテーションを行っています。ここに来所される多くの方が、言語や発音の問題などの不安や困り感を抱えています。言語聴覚士はそういった方々にとても必要とされる医療専門職です。特に小児のリハビリテーションに関して言えば、「就学」という、人生の中でも大きな壁を迎える時期に関わることができ、責任とやりがいを感じます。また、ご家族の不安をクリアしたり、ご本人のできることが増えたりしたときの笑顔をみると、この仕事をしていてよかったなと思います。これまで、多くの研修に参加したり、たくさんの本を読んだりして、技術の向上に努めてきましたが、今後も大学院への進学や認定言語聴覚士の資格取得、学会の認定資格の取得を行い、より質の高い療育が提供できるよう努めます。そして、言語訓練を必要としている方に１人でも多く利用していただけるよう、自らの目標を掲げて日々仕事に励んでいます。

言語･聴覚･脳機能について理解しやすい科目配置

言語、聴覚、嚥下に加えて、認知症や発達障害に対する言語聴覚療法についても、医学的知見に基づいた幅広い知識が学修できるよう系統的に科目を配置しています。

卒業生のコメント

中島　康平 さん（東洋大学卒）
言語聴覚専攻科　卒業

症例をもとにした実践的な講義。修得した知識を、すぐに実践できる充実した環境です

１年次の前期では、解剖学や内科学など言語聴覚士に必要な医学的な知識を身に付けるための講義が中心です。後期になると演習科目が増え、症例の情報から患者さんの状態を分析するなど前期で身に付けた知識を実際に使う機会が増えてきます。

印象的だった授業は、「成人言語障害学演習」の授業です。言語障害を抱える症例の情報をもとに患者さんのコミュニケーションの状態を把握し、目標を達成するためにはどのような方法で訓練を行うべきかを学生間で一から考える実践的な講義でした。

この講義では、実際の臨床場面をイメージでき、言語聴覚士の専門性について深く学ぶことができました。また、実際の患者さんに検査やリハビリテーションを適切に行うためにはどんな勉強が必要なのかを改めて認識しました。

本専攻科の魅力は講義の中で学ぶだけではなく、得た知識を実際に使いながら学ぶことができる点だと思います。

社会人経験を持つ方も多くクラス全体的に勉強に対するモチベーションが高く、今までの経験からそれぞれの得意分野があり、お互いに協力しながら勉強することができるのも本専攻科の魅力です。この充実した環境の中、国家資格を取得し、患者さんの笑顔を引き出せる言語聴覚士になりたいです。

2年間の学修の流れ

1年次　行き届いたアドバイザー制度のもとで言語聴覚療法の基本から専門までを修得。

専門基礎科目

【必修】
- ●医学総論
- ●解剖学
- ●生理学
- ●病理学
- ●内科学
- ●小児科学
- ●リハビリテーション医学
- ●耳鼻咽喉科学
- ●臨床神経学
- ●精神医学
- ●形成外科学
- ●臨床歯科医学･口腔外科学
- ●音声言語･聴覚医学
- ●中枢神経機能学
- ●生涯発達心理学
- ●学習･認知心理学
- ●心理測定法Ⅰ
- ●心理測定法Ⅱ
- ●言語学
- ●音声学
- ●音声情報処理学･聴覚心理学
- ●言語発達学
- ●リハビリテーション入門
- ●リハビリテーション概論
- ●リハビリテーション概論演習

専門科目

【必修】
- ●言語聴覚障害学概論
- ●言語聴覚障害学演習Ⅰ
- ●言語聴覚障害学演習Ⅱ
- ●言語聴覚障害診断学
- ●失語症･高次脳機能障害学
- ●失語症学
- ●失語症学演習
- ●高次脳機能障害学
- ●成人言語障害学演習
- ●言語発達障害学Ⅰ
- ●言語発達障害学Ⅱ
- ●言語発達障害学演習Ⅰ
- ●発声発語障害学
- ●運動障害性構音障害学Ⅰ（基礎）
- ●摂食･嚥下障害学Ⅰ（基礎）
- ●聴覚障害学Ⅰ
- ●聴覚障害学Ⅱ
- ●聴覚障害学Ⅲ
- ●聴覚障害学Ⅳ

【選択】●海外保健福祉事情Ⅰ（講義）

2年次　言語聴覚療法の専門領域をまとめ臨床実習に臨みます。

専門基礎科目

【必修】
- ●臨床心理学
- ●社会保障制度論･医療関連法規

専門科目

【必修】
- ●言語聴覚障害学特論Ⅰ
- ●言語聴覚障害学特論Ⅱ
- ●言語聴覚障害学研究法概論
- ●言語発達障害学演習Ⅱ
- ●音声障害学
- ●運動障害性構音障害学Ⅱ（応用）
- ●器質性構音障害学
- ●機能性構音障害学
- ●摂食･嚥下障害学Ⅱ（応用）
- ●吃音学
- ●小児聴覚障害学Ⅰ（基礎）
- ●小児聴覚障害学Ⅱ（応用）
- ●臨床実習

1週間の時間割例

	月	火	水	木	金	土
1時限 9:00～10:30	リハビリテーション入門	失語症･高次脳機能障害学	聴覚障害学Ⅰ	リハビリテーション概論	聴覚障害学Ⅱ	言語発達障害学Ⅰ
2時限 10:40～12:10	病理学	リハビリテーション概論		失語症･高次脳機能障害学		
3時限 13:00～14:30	内科学	生理学	中枢神経機能学	学習･認知心理学	解剖学	―――
4時限 14:40～16:10	失語症学	臨床歯科医学･口腔外科学	―――	心理測定法Ⅰ	音声情報処理･聴覚心理学	―――
5時限 16:20～17:50	医学概論	生涯発達心理学	―――	リハビリテーション演習	音声学	―――

特色ある授業（演習･実習）

成人言語障害学演習

失語症や認知症、摂食嚥下障害を抱えた症例に対する訓練や指導を自分たちで考え、報告します。学習した評価方法を基に問題を探索し、指導方法を考え、訓練や指導の効果を検証できる力を育てます。

小児聴覚障害学Ⅱ（応用）

通常の言語発達を基に聴覚障害児の言語力を評価し、発達段階に応じた聴覚検査を用いて補聴器や人工内耳の装用状況を把握し、言語コミュニケーション能力を育てるための訓練プログラムを立案します。聴覚以外の発達障害や知的障害を併せ持つ場合の対応についても学修します。